

「思ひやるべし」考：源氏物語以後の省筆

田村，隆
九州大学専門研究員，福岡教育大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/8924>

出版情報：語文研究. 98, pp.10-22, 2004-12-08. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「思ひやるべし」考

— 源氏物語以後の省筆 —

田 村 隆

て、中なるに、

つれぐと過ぎにし方の思給へ出でらるゝにつけても、
こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやい
かゞ思はん

さまざま書き尽くし給言の葉思ひやるべし。(須磨)

「京から遠く離れた須磨の地で、源氏は女君達へ文を綴った。
京へ人出だしたて給ふ。二条院へたてまつり給と、入道
の宮のとは、書きもやり給はず、くらされ給へり。宮に
は、

松島のおまの苜屋もいかならむ須磨の浦人しほたるゝ
ころ

いつと侍らぬなかにも、来し方行く先かきくらし、汀
まさりてなん。

内侍のかみの御もとに、例の中納言の君の私事のやうに

この「思ひやるべし」は、手紙のこまごまとした内容に
ついては読者諸氏が各々想像で補ってほしい、と作者が読者
の側を向いて述べるコメントである。「書かず」、「漏らしつ」
などと共に『源氏物語』が用いる省筆のレトリックと考えら
れよう。「思ひやる」は、古辞書の類に「想像オモヒヤル」(観智
院本『類聚名義抄』)、「想像オモヒヤル」(黒川本『色葉字類抄』)
と見られるように、「想像」に関わる表現である。すなわち、

読者に想像力を要求する省筆なのである。

だが、この物語に六十例ほど見られる省筆の多くのバリエーションにおいて、「思ひやるべし」はあまり用いられない。他に、

かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人もをのづからものとをからで、ほの見たてまつる御さまかたちを、いみじうめでたしと涙落としをりけり。御返書き給、言の葉思ひやるべし。
(須磨)

殿まいり給て、御覽するに、むかし御目とまり給しおとめの姿をほし出づ。辰の日の暮れつ方つかはす。御文のうち思ひやるべし。
(少女)

の二例があるのみである。前者の「思ひやるべし」について、玉上琢彌『源氏物語評釈』は、「御息所への源氏の返事は、哀切きわまりないはずである。よって作者は、「思ひやるべし」という。読者各自が頭の中で作ってみて、こんなのではない、もっとすばらしいのだ、そう思って、自分の作品は消してしまふ。そうすることを作者は望むのである」と述べる。これらについても、単に「書かず」と記すよりも読者側に寄りかかった省筆と言えよう。三例とも手紙に関わる点も注目

される。

この表現は歴史物語、中でも『栄花物語』に多く散見されることが、大木正義「思ひやるべし、推しはかるべし」によって指摘されている。^{注1}氏の調査によれば、『源氏物語』における「思ひやるべし」が三例であるのに対し、『栄花物語』のそれは三十七例にものぼる。また、「推しはかるべし」等、周縁の表現まで含めると実に四例対六十例とさらに明確な差異が現れるという。『栄花物語』の「思ひやるべし」をいくつか示そう。

三月廿六日にこの左大臣殿に検非違使うち囲みて、宣命読みのゝしりて、「みかどを傾け奉らんと構ふる罪によりて、大宰権帥になして流し遣す」といふ事を読みものゝしる。……北の方・御女・男君達、いへばおるかなるとのゝ内の有様なり。思ひやるべし。
(月の宴)

安和の変にまつわる混乱を描いた場面である。もう一例、懐仁親王の袴着について記した天元五年師走の記事を引く。

この冬若宮の御袴着は、東三条院にてあるべうおぼし掟てさせ給を、内には「などてか。内にてこそは」とおぼ

しの給はせて、十二月ばかりにと急ぎたゞせ給。……その程の儀式有様思ひやるべし。(花山たづぬる中納言)

これらの「思ひやるべし」について、大木氏は次のように述べる。長文にわたるが引用する。

栄花物語は源氏物語における当該の表現を、積極的にと評してよいほどに使用しているのであるが、私はこのことを 歴史物語の叙述の量を、読者との協力によって増大するためである と考えたい。「思ひやるべし」「推しはかるべし」の使用は、その文脈では具体的には叙述しなかつたものを読者に補わせよつとするものである。……

栄花物語は源氏物語よりも積極的にこの表現を使用することによって物語の量を増大したことになると言えよつ。栄花物語は言つまでもなく歴史を叙述することを旨としているから、読者に向かつて「思ひやるべし」「推しはかるべし」と促すことは作り物語よりも容易であると思う。過去において実際に存在したことを叙述する文脈においての方が読者の補充の協力は得られやすいであろう。作り物語はその舞台、登場人物などがいわば架空であるからそこにおいて当該の表現を使用しても読者は協力し

にくいことが多いのではあるまいか。

『栄花物語』に「思ひやるべし」が集中するという現象は、事実としては重要である。だが、その理由を「思ひやるべし」による物語の拡充が歴史物語は容易で、作り物語は困難という点に求める解釈については、少々図式的に過ぎ、再考の余地があると思われる。なぜならば、歴史物語以外の諸作品にもそこかしこで「思ひやるべし」が見られるのである。これは、この表現が用いられるのは必ずしも歴史の叙述といった文脈に関わらないことを示唆するものではなからうか。以下、歴史物語と作り物語という構図をいったん脇に置き、『源氏物語』に連なる省筆の系譜という観点から、この「思ひやるべし」を考えたい。

二

『源氏物語』以前にも「思ひやるべし」はわずかながら存在する。『うつほ物語』には冒頭、遣唐使として俊蔭が出生する場面に、

朝に見て夕べの遅なはるほどだに、紅の涙を落とすに、

遙かなるほどに、あひ見むことの難き道に出で立つ。父母・俊蔭が悲しび思ひやるべし。
(俊蔭)

の一例がある。また『落窪物語』には、

あこぎが心地もたゞ思ひやるべし。
(巻一)

かゝるひが物なれば、世づかぬ文は書出したる也けりと、人知れず思ひて、いみじくいとほし。北方の心地たゞ思ひやるべし。
(巻二)

乗りたる人の心地、たゞ思ひやるべし。
(巻三)

左の大臣殿、賀の事つかうまつり給ふ。事の作法いとめでたし。只思ひやるべし。
(巻四)

など七例が見られ、作者に好まれた表現であることが窺える。加えて、

年かへりては、姫君内に参り給はんとて、限りなくかしづき給程に、はかなくて年かへりぬ。二月に参らせ給書かずとも、儀式有さま思ひやれ。
(巻四)

のように、命令形を用いたものも一例存する。

いったん物語の文脈を離れるが、『今昔物語集』に至って、かなりまとまった数の「思ひやるべし」が現れる。「……ヲ可思遣シ」のような形でおよそ三十例見出される。物語と異なり、「ヲ」を伴う場合が多いのは、「漢文脈に近付く程客語表示の格助詞「を」が多くなる」という事情によるものである。そのうち、地の文に用いられたものを数例挙げる。

実二道ヲ飾り、金ヲ地ニ敷ケリ。何況ヤ、余ノ事ヲ可思遣シ。
(巻一)

自ラ心ヲ至シテ、香ヲ焼テ仏ヲ供養シ奉ラム功德ヲ可思遣シトナム語り伝ヘタルトヤ。
(巻二)

此ノ鳥ノ二羽ノ広サ、三百三十六万里也。然レバ大サ・勢、可思遣シ。
(巻三)

何況ヤ、此ノ経ヲ受持・誦誦・解説・書写セラム人ノ功德可思遣シ。
(巻六)

何況ヤ、誠ノ心ヲ法ノ如ク法花経ヲ書写シタラム功德可思遣シ。
(巻十二)

何況ヤ自ラ持チ人ヲ勸メテ令持メム功德ヲ可思遣シ。
(巻十四)

況ヤ、心ヲ発シテ造リ書テモ供養シ奉ラム功德ヲ可思遣シ。
(巻十七)

其ノ木ノ高サ、枝ヲ差タル程ヲ思ヒ可遣シ。(卷三十一)

「思ひやるべし」は「となむ語り伝へたるとや」等と同じく、一話の結びに用いられる事が多い。特に仏の功德を「思ひやるべし」と教条的に記す例が大変多く、功德を「思ひやらせる方向へと一話を収斂させている。先に見た物語の諸例に比して、かなり定式化された表現であることが窺える。^(註)また、その他の説話類では『宇治拾遺物語』に、

たゞその声の及ぶがぎりのめぐりの下人のかぎりもて来るにだに、さばかりおほかり。まして、たちのきたる從者共のおほさを思ひやるべし。(利仁芋粥事)

の例がある。このように、必ずしも歴史物語のみに「思ひやるべし」が現れるわけではない。

三

では『源氏物語』以降の物語においてはどのようであらうか。まず、『狭衣物語』について考察する。この物語に見られる省筆は、以下の二十四例である。

かやうにて、今日はあまたあんめれど、同じことにて止めつ。(卷一)

二所して臥し沈みたまふを、見たてまつる人々、うち思ひやるべし。(卷一)

母宮の見たてまつりたまはん御けしき、思ひやるべし。(卷一)

さすがに心づよくなりたまひぬれば、作法のこともなど思ひやるべし。(卷二)

その折の答へは、またいかが聞こえけん、忘れにけるぞ、口惜しきや。(卷三)

その夜になりて、殿、母宮居立ちつつ、出だしたてまいらせたまふさま、思ひやるべし。(卷三)

三日の夜の事など、例の事なれば、思ひやるべし。(卷三)

同じさまにてぞもてなしたまひける。そのほどの事、思ひやるべし。(卷三)

御前のしつらひ、ありさまなどは、思ひやるべし。(卷三)

その夜の事ども、書き続けまほしけれど、なかなかなれば。(卷三)

さまざま尊き事どもは多かれど、えまねばぬは、なかなか

かかひなし。(巻三)

かく書きつけたるよりは、見るはめでたくこそありけめと、思ひやるべし。(巻三)

各々、白銀の置口、蒔絵、螺鈿をし、絵描きなど、すべてまねび尽すべき方もなかりけり。(巻三)

世の例にも書き置かんとせさせたまひけり。口も筆も及ばで、いと口惜し。(巻三)

いとをかしう、歌ども多かりけれど、え書き留めずなりにけり。(巻三)

このほどのありさま、をかきも尊きも、夢のしるべの真似したるになりぬべければ、洩らしつ。(巻三)

今宵まで嘆き思ふ心の中を、泣く泣く、しめじめと言ひ続けたまへる、まねび続くべうもあらず。(巻三)

参らせたまふ日の事どもなど推し量るべし。(巻四)

日ぐらしおもしろき事どもを、まねびつくすべうもあらず。(巻四)

御湯殿の儀式ありさま、九日の夜までの御産養ひども書き続けずとも思ひやるべし。(巻四)

さださだとのたまはすること多かりけれど、あまりうたてあれば、漏らしつ。(巻四)

さまざまめでたきことのみ余りなれば、少々にまねびたらんは、なかなかそこなはるることもありなんかし。(巻四)

歌どもは扇に書かれたりしなど、同じことなればとどめつ。(巻四)

特徴は二つ。一つは物語の後半(特に巻三)に集中的に見られることである。筆を進めるにつれて省筆の手法に通じ、また実際、物語の前半ですでに一度記した儀式次第などにおいて、繰り返しを避ける必要が出てくるということであろう。これは、『つづほ物語』、『落窪物語』においても確認できる傾向であった。^{注4)}

そしてもう一つ、今問題にしたいのは、省筆の言に当該の「思ひやるべし」を用いることが多い点である。二十四例のうち十例。これは『源氏物語』全体でわずかに三例しかないことを思えば、割合として相当大きいと考えるべきである。『源氏物語』よりも「思ひやるべし」の比重が確実に増している。言うまでもないが、『狭衣物語』は歴史の叙述を内容とする物語ではない。とすれば、この物語に「思ひやるべし」が多く見られることは何を意味しているのだろうか。またそ

れは、『今昔物語集』における多数の例とも関わるものであるが、^(註)るつか。

四

さらに、「思ひやるべし」は、後続の中世の物語群にも現れる。概してこれらの物語には省筆を積極的に用いた形跡はないように思える。たとえば、『源氏物語』の続編を目して書かれた『山路の露』には一例だになく、『雲隠六帖』にも、

いかにおぼすかと、いとしりがたし。

(すもり 七・二六六)

御心のうちどもはしらすかし。(さくら人 七・二七二)

つめにわうじやうのそくはいをうけたまふと云々。

(さくら人 七・二七四)

などが見られるに留まる。^(註)他の物語に多い「書かず」、「聞かず」でなく、「知る」の語を用いる点、また和文には例の少ない「云々」を用いている点など、『源氏物語』が持つ省筆のスタイルにはあまり注意を払っていないように思われる。^(註)特異な言い回しによる省筆が時折見られるのが、この時期にお

ける省筆の特徴の一つである。

さて、「思ひやるべし」であるが、『鎌倉時代物語集成』所収の物語を検すると、凡そ次のような例が見られる。

いと心ばそげにうちなき給ふを、みたてまつる人々の心のうち、おもひやるべし。(あきぎり 上 一・二四)
ふるきよしあることを、とにかくにかきみだしたまえるを見給ふ心ち、おもひやるべし。

(あきぎり 上 一・四一)

とうぐうくらいにつかせたまひぬれば、いとどうちのけしきおもひやるべし。(あきぎり 下 一・五六)

しばし御もの語ありて、みきなどまいりて、あけがたにぞ行けいありける。御をくり物ども思ひやるべし。

(あまのかるも 四 一・二八一)

としのくれになりて、ことに御心ちさはがさで、をこみこいでをはしましぬれば、御心のうちども思ひやるべし。

(在明の別 一 一・三六〇)

さらぬほどのことだに、あはれふかく人のなびぎやすかんなる御ことのは、まして思ひやるべし。

(在明の別 二 一・三九八)

いとこまかにかたらひ給ことゞも思ひやるべし。

(在明の別 三 一・四二六)
さまぐきこえさせ給ことども思ひやるべし。

(在明の別 三 一・四四二)
所あらはしのほどなど、思ひやるべし。

(石清水物語 上 二・一九)
扱しもあらぬわざなれば、けぶりとなし奉るほどのかな

しき、思ひやるべし。
(石清水物語 上 二・四〇)
見給大納言の御心おもひやるべし。

(石清水物語 下 二・一〇八)
御うぶやしなひ、五夜、七夜などのこと、心ことに所々、

うちよりもせさせ給、おもひやるべし。
(石清水物語 下 二・一〇八)

せきかへしながるゝ御なみだもいろふかくなりゆくに、
おほかた世にあるひとみなみだをとゞめぬをりふしきへ、

しぐれのおともいとゞ袖ぬらしがちなるに、ましてかの
うぎの院には思やるべし。

(風につれなき物語 下 二・四一五)
さばかりのおとゞの御心に、これをいかにせんといだし

たてきこえ給ほどのぎしき、思ひやるべし。
(恋路ゆかしき大将 二 三・二六八)

御心どもをあはせたる事なれば、おとこ君の御心ち思ひ

やるべし。
(恋路ゆかしき大将 三 三・二七五)

何事も御心とゞむばかりとおぼさるれば、前裁などもさ
がの花の露ものこらず、鹿のねより外にみなうつつか(うまひ)

て、内のしつらひなども、いはずとも思ひやるべし。
(小夜衣 上 三・三七三)

立わかるべき心ちもし給はねど、さて有べきならねば、
御ぐしかきくだしなどしきこゆるも、涙いとのごひやり

給はずながら、御車にのり給ふ。たがひの心のうち、思
ひやるべし。
(小夜衣 中 三・三九一)

かなしみながらもとどまり給ふ心ちども、思ひやるべし。
(小夜衣 下 三・四三一)

「男もぞかへり侍らん」とていそげば、「後にこまかには
とて、文のあはれさおもひやるべし。
(小夜衣 下 三・四四六)

「かゝる事こそつけたまはれ」とて、姫君の文みせ聞え
給ふ。あはれにかきつゞけ給へる事、思ひやるべし。
(小夜衣 下 三・四四七)

其ほどのぎしき、いへばさらに、かきつゞけずとも、み
給はん人々はおぼしやるべし。
(小夜衣 下 三・四六四)

中宮も其のち姫宮まうけ給てけり。今の御さんのぎしき

は、今一きはまして思ひやるべし。

(小夜衣 下 三・四六六)

御すくせどもめめでたく、思ふ様な事も、中くかきつくすべくも侍らず。たゞみ給はん人人、おぼしやり給へ。

(小夜衣 下 三・四六六)

継母のあさましき有さま思ひやるべし。

(小夜衣 下 三・四六六)

めのまへにかはり行世のならひこそ哀に侍れ。人のめめたきためしには、山里の姫君にまさる人あらじとみえたり。み給はん人々も、思ひやり給ふべきなり。

(小夜衣 下 三・四六六)

かうやうのくだく敷事のみ、筆にも尽しがたく多かりけれど、ゆへある何ぞのさうしめきて、打聞みもかたはらいたければ、かつはかたくなしき口にも任せて、おほくはことそぎとどめにける。爰程のけしき、思ひやるべし。

(白露 四・一一八)

まつりの日のぎしきはおもひやるべし、……

(兵部卿物語 五・一五)

そつどもめしよせて、御いのり初め給ひ、との内さわぎのしるほど、おもひやるべし。

(八重葎 五・三六九)

つきせぬことをかきつくし給ふさまはおもひやるべし。

(我身にたどる姫君 二 七・五四)

さらにこと人ときこゆべきにもあらず御さまかたち、御こゑ、けしきなれば、御心ざし思ひやるべし。

(我身にたどる姫君 三 七・七一)

権中納言は、かひなきながら、又なくさむかたしなれば、宰相の君につくし給ふことは、おもひやるべし。

(我身にたどる姫君 四 七・一一五)

十月ついたち、中宮御けしきありて、いみじうなやませ給。女院あたちおぼしめしあつかふさま、おもひやるべし。

(我身にたどる姫君 四 七・一一八)

さは、かぎりにこそはとて、かきなでつくるはせ給ふ御なみだのほど、思ひやるべし。

(我身にたどる姫君 七 七・二二三)

いといふかひなくあさましくおはしますに、大宮の御心のうちおもひやるべし。

(我身にたどる姫君 七 七・二二四)

管見では、「思ひやるべし」は、あわせて三十例余り見出される。

以上を一覧すると、「思ひやるべし」が現れる頻度の高い作品としては、『あきぎり』、『在明の別』、『石清水物語』、『小夜衣』、『我身にたどる姫君』が挙げられ、逆に用例のない作品として、『あさちが露』、『いはでしのぶ』、『風に紅葉』、『とりかへばや』、『夢の通ひ路物語』などが挙げられる。この内、殊に『小夜衣』の八例は、作品の大きさから考えて相当に多いと言つべきであろう。結末近くには近接して四例も用いており、一層その印象を強める。「思ひやる」主体、すなわち読者を「み給はん人」と明示している点にも注目したい。また、手紙の内容に関して多く見られる点は『源氏物語』と類似する。

いずれにせよこれらはたしかに用例の数としては『栄花物語』に遠く及ばない。ただし、『源氏物語』の場合とは大きく事情を異にする。

なぜなら、『源氏物語』においてはあくまで「書かず」、「漏らしつ」などを含む様々な省筆の一形態としての「思ひやるべし」であったのに対し、中世期の物語においては、省筆の他のバリエーションは影をひそめ、ほとんどの物語において「思ひやるべし」が前面に立つのである。前述のように

時として特異な省筆表現にも出逢つものの、大筋で「思ひやるべし」を用いている。例えば、作品中に見られる省筆の用例のうち『在明の別』では五例中四例が、『我身にたどる姫君』では九例中六例が、また『あきぎり』や『小夜衣』に至つてはその全てが「思ひやるべし」なのである。そして、「思ひやるべし」が現れにくい作品にはそもそも省筆自体が少ない。すなわち、比率という観点から捉え直すと、『栄花物語』と中世物語の一群はむしろ同じ傾向を示すと言つことができるのである。

れっきとした作り物語である中世物語も「思ひやるべし」を重視しているのであれば、それは歴史物語における「叙述の量を、読者との協力によつて増大」させる性格というだけではやはり説明がつかないのではあるまいか。むしろ、この分布は省筆の表現が次第に「思ひやるべし」へと画一化・類型化していることを示唆するのではないか。すなわち、時代的な傾向性をより包括的な要因として考えるべきであろう。

『落窪物語』がやや例外的ではあるが、「思ひやるべし」が平安後期以降、中心的に用いられた省筆であったと考えれば、『栄花物語』や説話、そして『狭衣物語』その他の後期物語に多く見られることは無理なく理解できよう。もちろんその際、説話と歴史物語についての「説話は事実に基づいてある

から、歴史物語の類と共通する性質をもつてゐる（池田亀鑑「説話の特性」という指摘注9）、また『無名草子』の『あまのかるも』の評に、

言葉遣ひなども、『世継』をいみじくまねびて、したゝかなる様なれ。

と見られるような中世物語の「歴史物語的な傾向」、「歴史物語への近接」（市古貞次「中世物語の展開」注10）についてもなお十分に考慮する必要がある。

中世物語の作者が筆を執る時、そこにはすでに『源氏物語』が、「思ひやる」恰好の模範として存在していた。これらの物語が儀式の盛大さや主人公の容姿を「思ひやるべし」と記す時、その具体的内実はまず第一に「源氏物語」を想定していると考えることができよう。読者に託し得る領域が拡大しているのである。

物語という形式が次第に解体してゆくにつれ、省筆のレトリックも徐々に姿を消してゆく。荒木田麗女が遺した膨大な数の物語をはじめ、近世期の女流文学作品を検しても、省筆の例はわずかしか拾い得ないものが多い注11。その中で、マンネリ化しつつもある意味において省筆の定型として最後まで命

脈を保ったのはこの「思ひやるべし」であつたのかもしい。同時代では例外的に多くの省筆が見える『松蔭日記』（正親町町子）には、「書かず」、「聞かず」その他の表現と併せて、

かしこきにも、おぼしわかぬまで、悦び聞え給て、かしこまり申させ給ふさま、おもひやるべし。（こだかき松御所をはじめて、さるべき所々より、御をくり物など、れいにもこえて、めづらかなるみやび、おもひやるべし。
（深山木）

などの例がある注12。また、物語や日記以外の和文にも、『室町時代物語大成』所収の御伽草子や、『仮名草子集成』に収められる仮名草子その他に、若干ではあるが、

うへに塩竈をつくりて、くるまにのせて、引わたせし、そのほかの結構、おもひやるべし。（案内者 巻四）
かくて、初秋の比にも、なりて八。うらすゝしき風まちかけて。信長、日ことの御あそひ。かきつゝけすとも、思ひやるへし。（浮雲物語 上）
かしらより、あしもとまでの、けつかうさ。かきつけず

とも、思ひやるべし。

(浮雲物語 下)

年貢借物不足にして、妻子を売、生ながら別れ、遠国に
趣く悲び想像べし。(盲安杖)

いまた産れざりければ、女八くるしみ、あたりの心づか
い、思ひやるべし。(年忘嘶角力 卷二)

のような例が知られる。

そして、遙か明治に下つても、たとえば樋口一葉がこのレ
トリックを用いている。

八月廿日は千束神社のまつりとて、山車屋台に町々の見
得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ、
若者が氣組み思ひやるべし。

『たけくらべ』の第二節冒頭である。また、『うつせみ』に
も、

当主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば
父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは桜さく春
の頃よりと聞くに、……

といった例がある。王朝文学の文体を好んだ一葉の手になる
「思ひやるべし」は、平安朝以来続く省筆の系譜における残
照とも言えようか。

注

注1 『歴史物語の表現世界』新典社研究叢書 七四「新典社、平
成六年。『采花物語』に加え、増鏡などの例が紹介される。

注2 松尾拾『平安初期に於ける格助詞』を、「国語と国文学」十
五、昭和十三年十月。他に岩淵悦太郎『説話文学の用語』主
として今昔物語集について、「今昔物語集」日本文学研究
資料叢書「有精堂、昭和四十五年」など。

注3 『今昔物語集』の「思ひやるべし」については大木氏がすで
に用例を掲出している。また、説話における表現の類型性につ
いては山口仲美『平安文学文体の研究』笠間書院、昭和五十
九年）などに言及がある。

注4 中野幸一『うつほ物語』の「草子地」『宇津保物語論集』古典
文庫、昭和四十八年。

注5 三谷栄一『狭衣物語の文学の方法 物語の享受から「心深し」
の美意識まで』(『国文学 言語と文芸』五十二、昭和四十
二年五月)は、これらの「思ひやるべし」を「享受者としては
作品の中に融け込むことによつて読むべき、自己投影の方法
といふべきものである」と指摘する。

注6 『鎌倉時代物語集成』からの用例には、その巻数・頁数を付す。
六条御息所との出逢いを描いた宣長の「手枕」にも、省筆は
見受けられない。『源氏物語玉の小櫛』の中にも省筆について
の言及はない。

注 8

「おぼしやるべし」、「思ひやり給ふべし」を含む。尚、本稿では「推しはかるべし」を考察の対象から外したが、この表現についても、

けしからぬならひの御人さまを、ましてをしはかるべし。

(風に紅葉 一 二・四四九)

殿の御心のうち、たゞをしはかるべし。

(昔の衣 秋冬 三・一〇一)

これを見て、たゞ哀さ、をしはかるべし。

(藤井本住吉物語 四・一八〇)

御うづやの程の事、いはずともをしはかるべし。

(とりかへばや 四 四・四九六)

春宮の御心のうちは、をしはかるべし。

(我身にたごる姫君 三 七・八九)

などの諸例が散見される。

注 9

『今昔物語集』(『日本文学研究資料叢書』有精堂、昭和四十五年)。

注 10

『中世小説とその周辺』(東京大学出版会、昭和五十六年)。

注 11

調査は『江戸時代女流文学全集』、『荒木田麗女物語集成』所収の作品を対象とした。

注 12

岩波文庫版による。

注 13

『言安杖』は、『日本古典文学大系』所収の『仮名法語集』、『年忘漸角力』は、『断本大系』第十卷による。また、『今昔物語集』に通じる教条的な例として、国字本『伊曾保物語』(『一行古活字版』)にある、
悪人として、一たん、善人のふるまひをなせとも、終に、
わか本しやうを、あら八す物也、これをおもへ。

(からすとくしやくの事)

注 14

かいをやふり、つみをつくり、身をほろほす物也とぞ、みえけり、これをおもへ。
(出家と、ゑのこの事)の如き「これをおもへ」なども、「思ひやるべし」の延長線上にあるものである。この表現、キリシタン版『エソポの八ブラス』には見えず、ギリシア語版『イソップ寓話』を基にした現行の各種翻訳にもない。

『明治文学全集』(筑摩書房、昭和四十七年)による。

(たむら たかし・本学大学院博士後期課程)